

(十二) 3年目

どういう訳か、この秋は山羊の発情がこない。夏は仔山羊が満5カ月になるまで傍にいて、毎日乳を飲み、女房もセッセと乳を搾ったせいだろうか？ 人間だって、授乳を続けていたら妊娠しにくいと言うではないか。

が、そのわりに雪の腹はしだいに膨れていくのである。

オカシいなあ。

まさか腫瘍とか？

でも元気だし。

夫婦して首をひねっていると、厳寒の2月の夜明け、山羊の雪はただならぬ声をあげ、1時間後、仔山羊を1匹産み落とした。そしてもう1匹。

ウツソオー。

妊娠していたんだ！

病気じゃなかったのはいいけど……。

いったい、父ちゃんはどこ誰よ？

聖母マリアの処女懐胎じゃあるまいし、女房は種つけに連れて行っていない。周りにほかの山羊はいない。

「息子だよ」

あ然として口を開けている女房に、出勤前の亭主が苦い顔で告げた。

「えっ？」

「ほかにいないだろ」

……確かに。

男同士はよく理解できるものか。

あきれ果てた女房は、可愛い筈の仔山羊を抱きに行く気にもならない。餌だけはいつもの牛の配合飼料をたっぷりやった。

まさかマサカの近親相姦。

アイヤー。

そういえば去年9月、手放す前の仔山羊2匹は生後5カ月でかなりデカくなっていた。草を食べさせる屋間はともかく、夕方になって3匹を連れ帰ると、檻は元々1匹用の住まいだけにエラク狭そうだった。

そして雄山羊の太郎はイッチョマエに偉ぶって、生後すぐから妹の花にも母ちゃんにもよく横からや後ろから乗っかっていた。代わりに花がやることもたまにはあった。

亭主も女房も、「これは、犬や猿もやる『俺のほうが偉いんだぞ、コラ、わかってっか』という示威行為で、行為の呼び名はマウンティング（乗っかること、という意味）」とは解していたが、一抹（いちまつ）の不安がないではなかったのである。

だいたい山羊は高いところが好きだから、マウンティングでなくても、上りたがるのは箱の上だけではない。母ちゃんが座ってる背中の上にも、太郎も花も代わるがわる小さな蹄で立ったりするもので、母ちゃん山羊の背中が泥まみれになって可哀そうだった。

まあ人間でも、親は幼な児を背中にまたがらせてお馬さんしてやったり、肩車したり、するけれど。

おもしろいのは、小屋の中で山羊たちがあまり鳴かないことだった。母ちゃん山羊が背中に乗られた仔を嫌がる時は黙って立ちあがり、逃げる。仔山羊のほうを追いかける時も、黙って追いかける。コミュニケーションに鳴き声は使っていないのである。近ければ、動作で意思疎通はできるらしい。鳴くのは、小屋の外で、離れている仔や母を互いに呼ぶ時に限られる。

それにしても、太郎も花も甘えん坊で、延々母ちゃん山羊の乳を吸っていたのである。まさか、その太郎がもう「大人」になってるなんて思わなかった。

頼むから、母ちゃんの乳を吸ってるのに種つけなんてするなよな！

二重にため息が出る。

山羊は繁殖力が強く、沖縄のどこぞの島に、ある人が一つがいの山羊を置き去り

にして、数年たって戻ってみると島中山羊だらけに増えていたという。が、全部それも近親相姦である。

生殖行為は種の保存のための本能であるとされる。女房が十数年前アメリカの短大で「文化人類学」の講義をとった時、人間のセックスは文化であると教授が断言した時、性欲に溢（あふ）れていたであろう若い 50 人の学生は圧倒的なブーイングで応じた。時間がなかったのか、ふだんなら抱腹絶倒の余談も混ぜる教授は切り捨てるように授業を終え、女房も疑問を抱えたまま日本へ帰った。

が、こうして犬猫山羊の交尾を身近に見ていると、確かに、雌の発情期にのみおこる性欲と短時間で終わる交尾を見ていると、動物の場合は性行為が本能であると思う。が、人間の場合では性的結合は愛情に基づくものが多いし、より長時間にわたる。そのうえ同性愛のように生殖に結びつかないものまで含まれる。レイプの目的のひとつには、相手を支配することもあるらしい(どんな目的にしろ許せない)。となると、人間のセックスは教授の言ったように、本能だけではなく文化的な側面が大きいのかと、女房は考えこむ。

女房は山羊を買った農家に電話をしてみた。

「親子でやっちゃうってのは時々あるんですよ。でも、だからって産まれた仔がおかしいってことはあんまなくて、大丈夫みたいですよ」

「ハア、そうなんですか」

「ええ、夏まで待ってもらえりゃ山羊屋さんが長野から来(く)つから、ウチで引き取りますけど」

「イヤ夏になるまで置いてたら、また大人になっちゃって近親交配したらたまない」

「そうですねえ。それなら、貰ってくれる人さいたなら、誰にでもあげっちゃまってかまわねえですよ」

決定。

この仔山羊たちは、ひと月ほどは母ちゃんの乳を吸わせて、2カ月目に入ったら

ソッコー養子に出すぞ！

折しも1年中で一番寒い季節である。吹きすさぶ木枯らしに生まれたての仔山羊が凍えてはいけないと、亭主はプラスチックの波板やら保温シートやら買い足して、小屋の半分ほどを囲いこんだ。

1週間たって、いつものように母山羊を小屋のすぐ外につなぐが、2月では青草がない。それでも、小屋に閉じこめておくのは可哀そうだから、女房は3匹を連れ出す。仔山羊は2匹そろって跳ね回り、母ちゃん山羊が呼ぶのに答えない。姿も見えないと思ったら、枯れ木を積んだ陰で2匹寄り添い、丸くなって平和に眠っていた。

親の心、仔知らず、だねえ。

仔山羊の名前は、2月生まれで雄が「プラム」雌が「梅」と決まった。中学生の末娘はふだん世話は焼かない癖に、命名の時だけは譲らないのである。

どういうわけか、今までになくプラムも梅も人間を嫌う。寄りつかないだけでなく、なんとなく表情に敵意がある。生まれて間もないころ、近親相姦にあきれ果てた女房たちがあまり抱っこしなかったから、今までの仔山羊ほど人間に慣れていないのかもしれない。

おまけに梅はやたらとよく鳴いてやかましい。乳は足りているようだが。

幸い今のところ、2匹とも身体の異常はないようである。母ちゃん山羊は青草がないものだから、多めの配合飼料だけでは足りないのか、あっという間にやせ細ってしまった。

母はツライね。

4月の初めには、夫婦して法事のため山口県の実家まで1週間帰らなければならない。家が空になるこういう時には、犬の散歩と山羊と猫の世話のため、近所の中高生を雇う。欧米式である。子どもの同級生とその親の顔をあれこれ思い比べ、あそこならキチンとやってくれるだろう、というところに、餌の入っている土間の鍵

だけ渡して「1日500円、キッチリやってくれたらボーナス追加するからね」と頼む。

しかしその前に、なんぼなんでも仔山羊はヨソへやってしまわねば。

幸い近所の人と同級生が、梅を貰ってくれると言う。

では雄山羊の貰い手は、生活情報誌で探そう。

以前、犬のジョンに困って、生活情報誌の「もらってください」コーナーに二度掲載してもらったことがある。一度目はともかく、二度目は犬の性生活に興味を抱く変態男から電話がかかってきただけで、女房は腹が立つやらゲンナリするやら、はては人間の奥深さ(?)に首を振るやらであった。

今回、はたして山羊を欲しい人なんているのだろうか？

亭主の予想はゼロである。

女房の予想は、「いるかもしれないじゃん？ やって見ないとわかんないよ」

当たって砕けろのポリシーはいつも通りで、「玉砕」は覚悟のうえである。

結果は、なんと土日計15本の電話がかかるという盛況ぶりだった。

えー、スゴイッ。

ここまで山羊を欲しがるとは！

予想が当たった女房はホクホク顔で亭主に威張りまくる。

草を食べる山羊は新聞やテレビで見かけるから、「環境に優しいエコな除草獣」として流行しているのだろうか。

10本目の電話では、「わたしは63歳で、先年女房に先立たれたあげく、自分にも癌が見つかって落ちこんでいます。山羊でも飼ったら元気が出るんじゃないかと思ってお電話しました。どうかお願いします」なんていう懇請までされて、人生模様のいろいろに触れる機会にもなってしまった。

ともあれ無事にプラムも貰われていき、女房も亭主も喜び安心して実家へ帰った。

ところが、今回は子離れが早すぎたのか、乳が張って痛かったのか、それとも草

場に出してもらえなかったのが不満だったのか、夫婦が留守の1週間、母山羊の雪はずっと鳴いていたという。向かいのオシャレなばあ様が、「可哀そうでねえ、同じ母親としてあたしもわかるよ」とエラク山羊に同情した。